

平成24年度

研究紀要

第26号

特別支援教育の推進に関する研究

視覚障害教育における自立と社会参加を

見据えた指導の在り方に関する研究

～キャリア教育の視点による教育活動の改善・充実～

北海道立特別支援教育センター

まえがき

特別支援教育の本格実施から6年が経ちました。この間、学習指導要領が改訂され、特別支援学校においては、一人一人に応じた指導の充実や自立と社会参加に向けた職業教育の充実などの観点から、一貫した教育課程の改善が課題となっております。

また、平成24年7月に、中央教育審議会初等中等分科会から「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」が示されました。今後の特別支援教育の方向性を示す重要な提言となっておりますが、その中においても、特別支援学校において、幼稚部、小学部、中学部、高等部で一貫したキャリア教育を推進している取組について一層発展させることの必要性が指摘されています。

このようなことから、望ましい自立と社会参加のために、一貫した教育の観点で学校における教育課程等を見直し、教育実践の一層の充実を図ることが高い専門性を有する特別支援学校に求められるものと考えています。

本道においては、幼稚部から高等部専攻科までの一貫した教育により培われる視覚障害教育の専門性の維持・向上を図り、その専門性を生かした本道における視覚障害教育の拠点校としての役割を果たすため、平成27年度に視覚障害教育のセンター校の新設が予定されています。

センター校においては、幼稚部から高等部専攻科までの一貫して継続的な指導に携わる視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の視覚障害の状態に応じた自立活動の指導を行うことにより、学習や生活のための力を育成するとともに、学力の向上を目指した教科指導の充実を図ることが期待されています。

そのために、社会的・職業的自立と社会参加を目指した幼稚部から高等部専攻科までの系統的なキャリア教育・職業教育（専攻科）の実践により、将来への見通しをもった学校生活を送ることができる体制の整備を図ることが緊要な課題になるものと考えております。

本研究では、このような動向を踏まえながら、センター校の対象である盲学校における教育実践を、キャリア教育の視点で検討・整理し、教育課程を編成する上で、必要となる手順や改善方策などをまとめました。

本研究は、視覚障害に視点を当ててまとめておりますが、キャリア教育の考え方やキャリア教育の視点を生かした教育課程づくりの考え方などは、他の障害種でも参考にさせていただけるものと考えております。

各学校の実践や研究・研修活動にご活用いただき、その成果や課題、ご意見などをお寄せいただければ幸いです。

最後になりましたが、本研究に当たり、多大なご支援をいただきました研究アドバイザーの国立特別支援教育総合研究所の田中良広総括研究員及び研究協力校の高等盲学校、札幌盲学校の皆様、並びに関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

北海道立特別支援教育センター所長

藤 根 収

特別支援教育の推進に関する研究

視覚障害教育における自立と社会参加を見据えた指導の在り方に関する研究
～キャリア教育の視点による教育活動の改善・充実～

上村 喜明**** 森田 浩司* 立田 祐子*** 三浦 貴徳** 坪川 寛司*

本研究を活用するために 1

I 研究の目的

- 1 研究の目的 2
- 2 視覚障害教育の現状 2
- 3 視覚障害教育の課題 3
- 4 本研究の考え方とキャリア教育 4
- 5 視覚障害教育において必要な能力 6

II キャリア教育の視点で特別支援学校（視覚障害）の

教育課程をとらえ直す手順

- 1 幼児児童生徒の発達の段階を適切に把握する 10
- 2 全体計画を作成する 11
- 3 段階表を活用し、キャリア発達を促す能力を明確にする 12
- 4 キャリア教育と指導の関連を図る 13

III 取組の実際

- 1 小学部5年 生活体験発表 17
- 2 中学部1年 数学 19
- 3 高等部3年 インターンシップ（就業体験） 20

IV まとめ

- 1 本研究の構造 22
- 2 全体計画・段階表（試案）について 24
- 3 研究の成果 24
- 4 今後の課題 24
- 5 資料

「キャリア教育の全体計画（例）」 25

「視覚障害教育における

キャリア発達を促す能力や態度の段階表（試案）」 . 26

引用文献・参考文献 27

研究の概要

研究の趣旨

近年、児童生徒が職業について基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うことが必要とされている。特別支援学校においても、幼稚部・小学部・中学部・高等部等を通して、自己の生き方を考える機会の充実により、将来の生き方を考え行動する態度や能力を育成することが求められている。

そのため、幼児期から青年期まで一人一人のキャリア発達や自立を促すキャリア教育の推進を図ることが大切となっている。特に、学校全体の教育の在り方をキャリア教育の視点により幅広くとらえ直すことで、自立と社会参加を見据えた教育課程の改善・充実が図られるものと期待される。

このようなことから、近年では道内の特別支援学校においても、キャリア教育を学校経営の重点に置いたり、校内研修で取り上げたりする学校が増えるなど関心が高まっている状況にある。

また、本道においては平成27年度、幼稚部から高等部専攻科まで一貫した専門性の高い教育を実現するための視覚障がい教育センター校が開校となる予定である。

そこで、本研究では、このような動向を踏まえて、特別支援学校（視覚障害）において幼稚部から高等部専攻科までの一貫した教育の充実を図るために、キャリア教育の視点でこれまでの教育計画をとらえ直す方策について明らかにする。指導に関する事例や情報を収集・整理し、校内研修の方策や特別支援学校（視覚障害）において教育計画を作成する際に活用できる指導資料とすることを旨とする。

研究の目的

道内の視覚障害者である幼児児童生徒に対する教育を行う特別支援学校（以下、「盲学校」）において、幼稚部から高等部専攻科まで、実践事例等の収集・分析等を通し、将来の自立と社会参加につながる一貫した教育の充実を図るために必要な手順を明らかにし、課題解決のための方策を検討する。

研究の内容、方法

1 研究の内容

- (1) キャリア教育を特別支援学校（視覚障害）の教育課程に位置付けるために必要な手順について、整理する。
- (2) 視覚障害教育におけるキャリア発達を促すために必要となる諸能力を示し、小学部、中学部、高等部それぞれの指導とキャリア教育との関連について実践を基に検討する。
- (3) 幼稚部から高等部までキャリア教育の視点を基に一貫した指導を行うために必要な、「キャリア教育の全体計画」と「キャリア発達を促す能力や態度の段階表」について、本研究の実際の取組から考察する。

2 研究の方法

本研究は平成23年4月から平成25年3月までの期間、次の方法により実施する。

(1) 文献研究

- ア 各教科等や自立活動とキャリア教育の関連について文献調査を行う。
- イ 全国・全道的な特別支援教育におけるキャリア教育の動向について文献研究や調査研究を通して整理する。

(2) 事例研究

- ア 研究協力校への幼児児童生徒のキャリア教育に関する研修支援を実施し、考察する。
- イ 研究協力校とのキャリア教育に関する事例について協議を行い、考察する。

研究の成果

- 1 キャリア教育を特別支援学校（視覚障害）の教育課程に位置付けるために必要な手順について、整理した。
- 2 視覚障害教育におけるキャリア発達を育成する諸能力を示し、小学部、中学部、高等部それぞれの指導とキャリア教育との関連について実践を基に検討し、実践事例を掲載した。
- 3 幼稚部から高等部までキャリア教育の視点を基に一貫した指導を行うために必要な、「キャリア教育の全体計画」と「視覚障害教育におけるキャリア発達を促すための能力や態度の段階表」について、本研究の実際の取組から考察し、「試案」を作成した。

視覚障害教育の現状と課題を整理します。

自立と社会参加を見据えた教育活動の在り方について、キャリア発達を促す視点から、教育課程をとらえ直す手順を明らかにします。

Step1	幼児児童生徒の発達の段階を適切に把握する
Step2	全体計画を作成する
Step3	段階表を活用し、キャリア発達を促す能力を明確にする
Step4	キャリア教育と指導の関連を図る

キャリア教育の視点で教育活動を具体化していく方法について、取組の実際を示します。

小学部5年 生活体験発表

中学部1年 数学

高等部3年 インターンシップ（就業体験）

IV まとめ

本研究の成果と課題について整理します。

I 研究の目的

1 研究の目的

道内の視覚障害者である幼児児童生徒に対する教育を行う特別支援学校（以下、「盲学校」）において、幼稚部から高等部専攻科まで、実践事例等の収集・分析等を通し、将来の自立と社会参加につながる一貫した教育の充実を図るために必要な手順を明らかにし、課題解決のための方策を検討する。

2 視覚障害教育の現状

(1) 道内の幼児児童生徒の在籍数

現在、本道には幼稚部及び小・中学部を併設した盲学校が4校（札幌、函館、旭川、帯広）、高等盲学校が1校、合わせて5校の盲学校が設置されています。さらに、理療^{※1}教育の充実等を図るため、高等盲学校に、附属理療研修センター^{※2}が併設されています。

図1は、本道の盲学校4校と高等盲学校の在籍者総数の推移を表したグラフです。本道の盲学校の在籍者数は、平成元年度の313人に対し、平成24年度は174人と年々減少しており、平成24年度の在籍者174人のうち、高等盲学校には、78人が在籍しています。幼稚部、小・中学部併設の盲学校における少人数化の傾向がみられます。

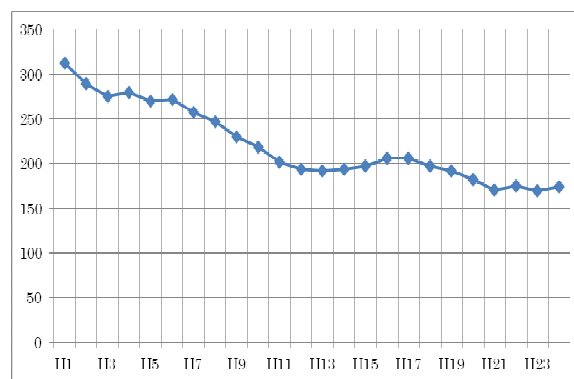


図1 道内盲学校の幼児児童生徒の在籍者数

図2は、盲学校の重複障害学級に在籍する児童生徒の割合の推移を表したグラフです。平成6年度は小・中学部・高等部重複障害学級に在籍する児童生徒の割合がそれぞれ25%程度であったのに対し、平成24年度は小学部47.5%、中学部43.8%、高等部34.2%に増加しており、障害の重度・重複化、多様化の状況がみられます。

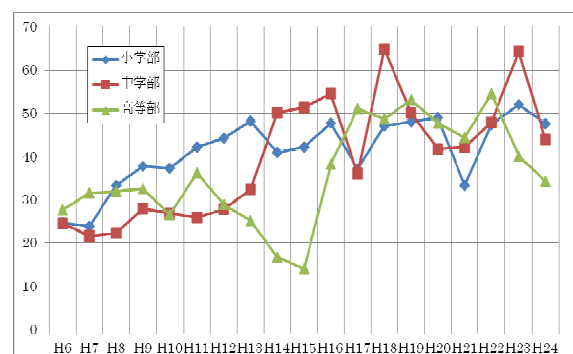


図2 道内盲学校の重複障害学級に在籍する児童生徒の割合

※1「理療」 あん摩、マッサージ若しくは指圧、はり又はきゅうによる治療技術の総称。

※2「附属理療研修センター」 本道における理療教育の充実を目的として、理療教育に関する調査・研究・研修事業をはじめ、視覚障害のある理療従事者（医師以外の者で、あん摩、マッサージ若しくは指圧、はり又はきゅうを業とする者）の資質向上や理療の普及啓発に関する事業を行う施設。

(2) 高等盲学校卒業生の進路状況

盲学校4校の中学部の卒業生の多くが全道域を学区とする高等盲学校に進学しています。

図3、4は、平成10年度から平成23年度の高等盲学校卒業生の進路状況を表したグラフです。

普通科の卒業生の進路は、専攻科への進学に加え、大学、専門学校及び就職、施設入所など様々な進路を選択しています。(図3)

専攻科生の進路先は就職が半数以上を占めて、治療院や病院などの進路先を選択しています。(図4)

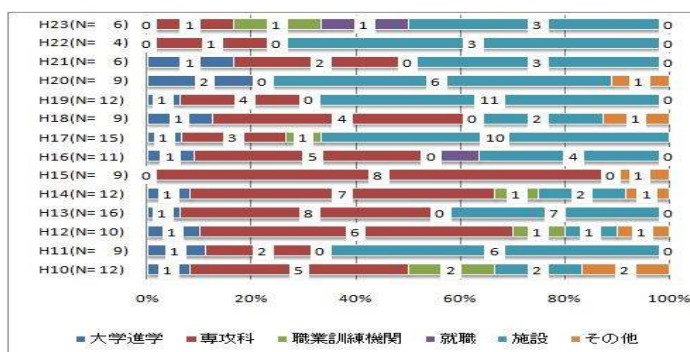


図3 高等部普通科卒業生の進路状況 (H10~23)

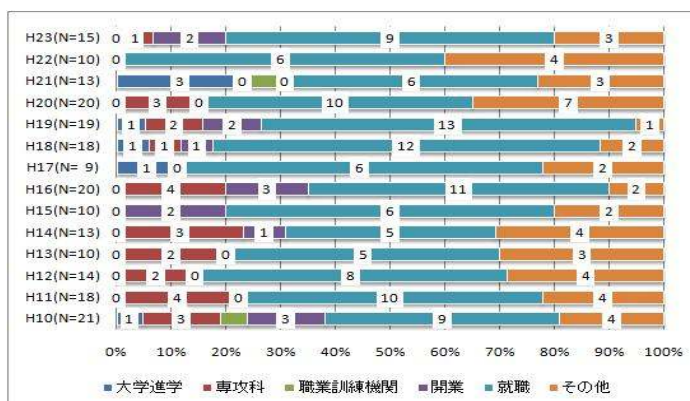


図4 高等部専攻科卒業生の進路状況 (H10~23)

3 視覚障害教育の課題

(1) 視覚障害教育の課題

- ア 少人数化の現状により、互いに学び合う場が減少し、課題を解決する経験が不足しがちになることから、幼児児童生徒が、互いに協力し主体的に考え、課題を解決する経験を増やすための工夫が更に必要になると考えます。
- イ 障害の重度・重複化、多様化の現状により、幼児児童生徒の障害の状態を把握し、一人一人の教育的ニーズに応じ、きめ細やかな指導を行うことが一層必要になると考えます。
- ウ 進路の多様化の状況により、進路選択の幅が広がり、一人一人の自立と社会参加に応じ、適切に指導する必要があると考えます。
- エ 少人数化、重度・重複化、多様化等の現状から、今後、視覚障害教育のセンター校設置等、各学校が将来に向けた自立と社会参加への適切な指導を行うためには、幼稚部から高等部専攻科までの一貫した教育の充実を図ることが重要になると考えます。

(2) 視覚障害教育の課題解決のために

このような課題を踏まえた指導を効果的に行うためには、幼児児童生徒の特性に応じた指導内容や日常的な取組の成果や課題について今一度見直し、幼稚部から高等部専攻

科まで一貫した指導へと改善を図ることが必要です。そして、この一貫した指導の積み重ねが、将来の自立と社会参加につながると考えます。（図5）

そこで、本研究では、視覚障害教育において「将来の自立と社会参加につながる一貫した指導」を一層充実した取組にするため、どのように考え、具体化するかに焦点を当て、先行研究などによりこれまでの現状と課題を把握しました。そして、その結果、重点化すべき指導を次の3点ととらえました。

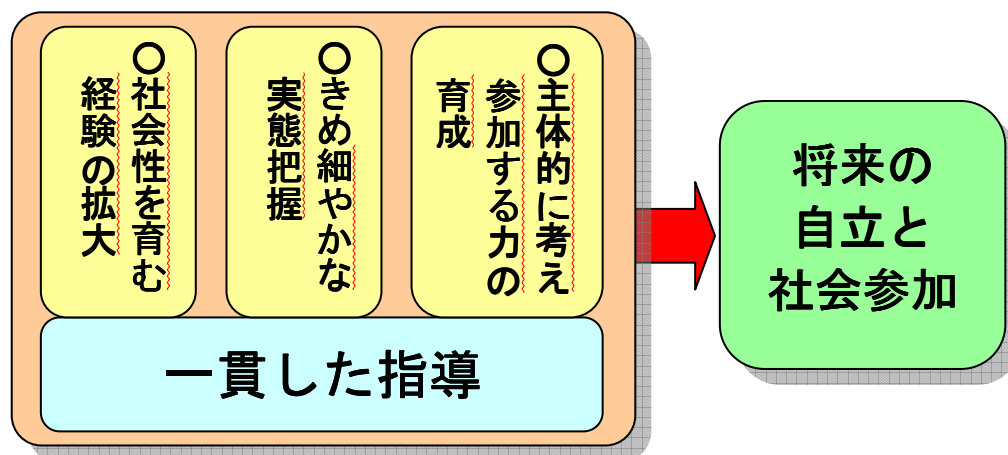


図5 視覚障害教育の課題

4 本研究の考え方とキャリア教育

(1) 研究の仮説

これまでも視覚障害教育の中では、「社会性を育む経験の拡大」「きめ細やかな実態把握」「主体的に考え、参加する力の育成」は、大切にされ、実践が進められてきました。

幼児児童生徒一人一人の「将来の自立と社会参加」のために幼稚部から高等部専攻科まで一貫した指導を行う場合、どの段階でどのような力を育成するかについて全体的に見直していくことが必要となります。さらに、視覚障害教育の場合、視覚の状態に応じて、歩行、点字等のコミュニケーション、日常生活動作等、将来の自立に向けて身に付けることが必要な力があります。

本研究を進めるに当たって、現在の幼児児童生徒一人一人にとって必要な力は何か、また、どこでどのように指導するのか、全体として一貫した力の育成につながるかという視点が重要であると押さえました。

これらを踏まえると、前述の視点を含む「キャリア教育」の視点を取り入れることで、視覚障害教育の課題解決を図ることができると考えました。

(2) キャリア教育

「キャリア教育」という用語は、平成11年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」で初めて記載されました。本答申では、「学校教育と職業生活との接続」の改善を図るために、小学校段階から発達段階に応じてキャリア教育を実施する必要があると提言されています。

また、平成20年1月の中央教育審議会答申「幼稚部、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」では、新しい学習指導要領においてキャリア教育の充実が求められ、同年3月には小学校学習指導要領、以後、中学校、高等学校、特別支援学校の学習指導要領が本答申に基づいて改訂されました。

キャリア教育は、幼稚園や小学校から高等学校に至る系統的・組織的な教育を推進するための基盤として極めて重要な意味をもっています。キャリア教育の指導内容・方法の充実により、従来の教育を見直したり、幼児児童生徒が夢や希望をもって学ぶ意欲や働く喜びを実感させたりすることができます。人間関係を形成する力や目標に向かって道を切り開く力、自己を高めていく力など、幼児児童生徒自らが力を付けることによって課題の解決に役立てることが期待できます。

* キャリア教育の定義

キャリア教育とは、次のように定義されています。

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（中央教育審議会,2011）

キャリア発達とは、次のように説明されています。

キャリア発達とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」である。

「小学校キャリア教育の手引き」（文部科学省,2011）

(3) キャリア発達を促す能力

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく場面は、学校教育の様々な活動の中にあると考えられます。

例えば、係活動や集団での役割分担の中にも存在します。人はこのような役割に取り組む中で、その意義を見付け、価値を感じ、自分らしい生き方につなげていきます。

そのようなキャリア発達を促すために、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（中央教育審議会,2011）によると、「キャリア発達を促す能力は『基礎的・汎用的能力』である」とし、4つの能力を提示しています。

（図6）

基礎的・汎用的能力を幼稚部、小・中学校、高等学校と学校教育の中で様々な場面を通して育成することが求められています。

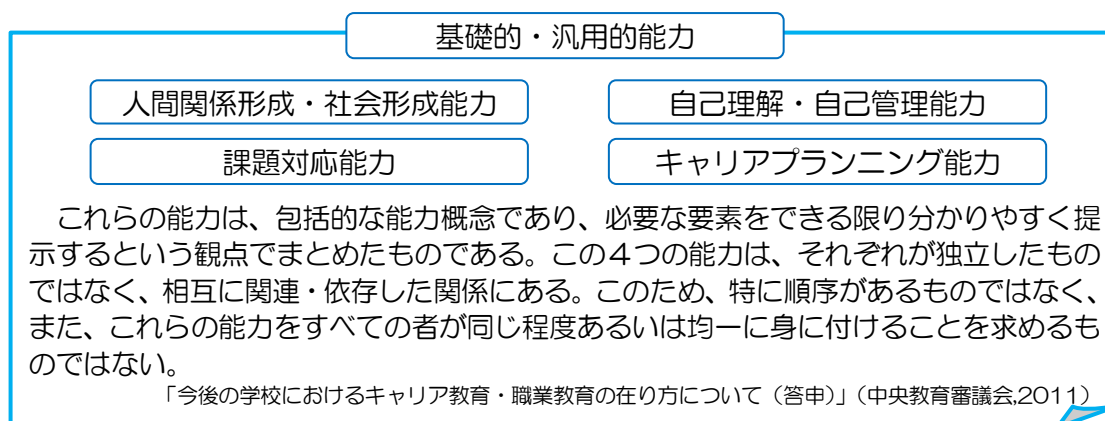


図6 基礎的・汎用的能力

5 視覚障害教育において必要な能力

(1) 視覚障害の障害特性により必要な能力

視覚障害の障害特性として、特別支援学校学習指導要領解説総則等編によると、「視覚による情報収集が困難なために、限られた情報や経験の範囲内で概念を形成する場合がある。特に実体や具体的経験を伴わない、言葉による説明だけで事物・事象や動作を理解してしまう傾向が見られる」ことや「環境を把握したり、状況を判断したりすることに困難があるため、空間や時間の概念の形成が十分でない場合がある」（文部科学省,2009）ことが指摘されています。このことから、物の形や大きさ、手触り、構造、機能等を触察によって観察したり、保有する感覚を有効に活用し、空間や時間などの概念を手掛かりとして、周囲の状況を把握したり、環境と自己との関係を理解したりして、的確に判断し、行動できるようにするよう、様々な場面を通して指導することが大切です。

視覚に障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加を考えると、障害の特性を踏まえつつ、保有する感覚を有効に活用し、事物をとらえる力を各段階において適切に育成する必要があります。そこで、「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力」を考えると、保有する感覚を有効に活用して事物などをとらえる力の育成も加えて考えることが必要ととらえました。（図7）

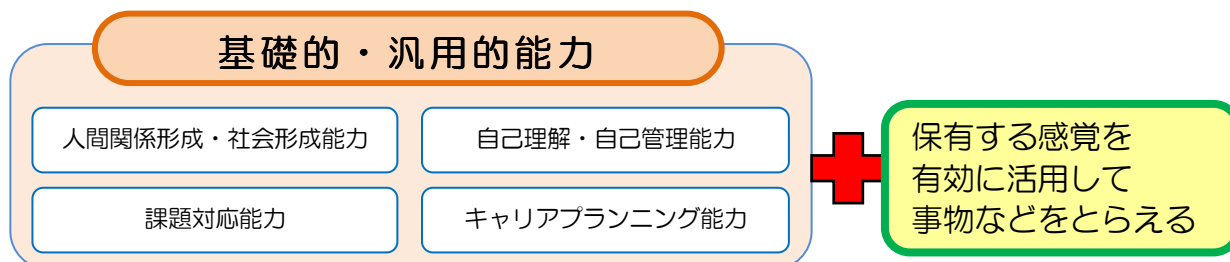


図7 視覚障害の障害特性により必要な能力

＊「基礎的・汎用的能力」

「基礎的・汎用的能力」は、能力という言葉から、「できる」「できるようにする」ととらえられがちですが、ここで定義される能力は、competency（コンピテンシー）の訳語で「育成」という意味が込められており、幼児児童生徒の「やってみたい」「なりたい」という意欲を含めた言葉として使われています。

(2) 視覚障害教育における「基礎的・汎用的能力（5つの能力）」の育成

幼稚部から高等部まで幼児児童生徒の発達の段階に応じ、一貫した指導を行うには、それぞれの発達の段階で、育むべき力を明確にしていくことが必要です。社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力としての「基礎的・汎用的能力」を具体化し、学校と社会・職業との接続を考える上でも意義があることです。

前述のように、「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力」は、幼児児童生徒の障害の特性を踏まえると、従前の「基礎的・汎用的能力（4つの能力）」に「保有する感覚を有効に活用して事物などをとらえる力」を加えることが必要になります。この力を育成するために、本研究では、「感覚の情報を処理する能力」として従前の4つの能力に加え、「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力（5つの能力）」としました。（図8）

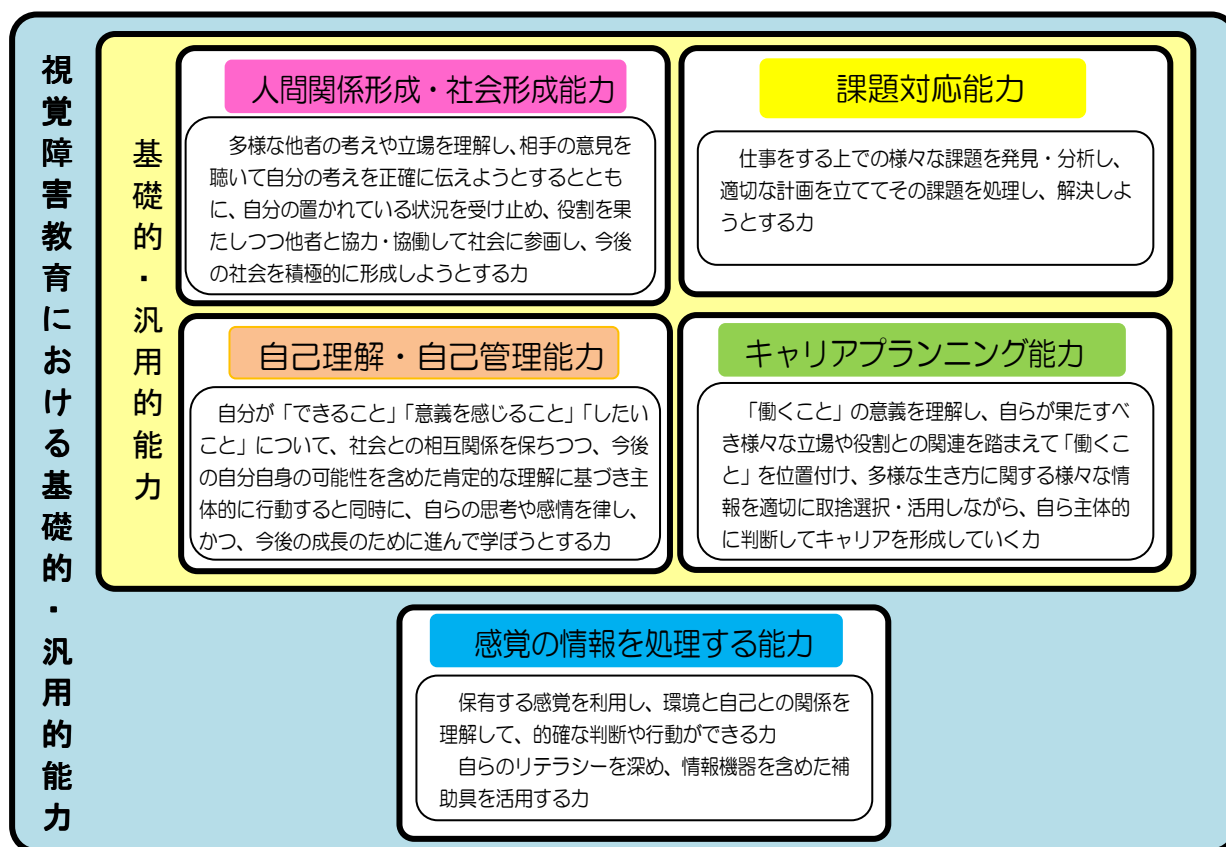


図8 視覚障害教育における「基礎的・汎用的能力（5つの能力）」

(3) 視覚障害教育における一貫したキャリア教育の視点による教育のイメージ

図9は、学校の教育課程や家庭・地域社会との連携協力との関連の中で、発達段階ごとにキャリア発達を促す教育の在り方を示しました。「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力（5つの能力）」を幼稚部から高等部において具体化するとともに、関連性、継続性を明確にしていくことで将来を見据えたものとなると考えます。

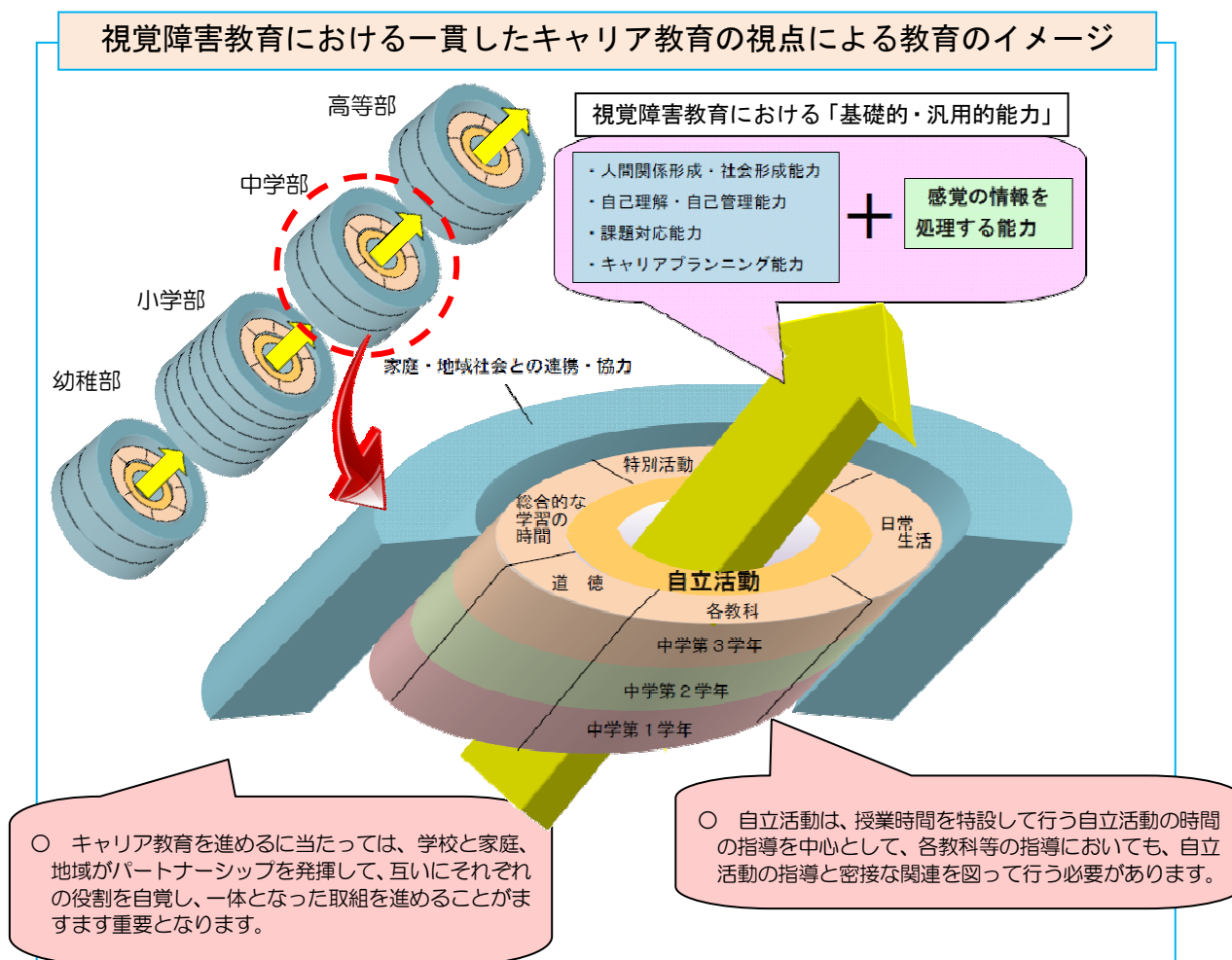


図9 視覚障害教育における一貫したキャリア教育の視点による教育のイメージ

(4) キャリア教育を教育課程に位置付けるために

幼稚園から高等部までキャリア教育の視点による一貫した指導を行うためには、学校としてキャリア教育に取り組む計画（以下、全体計画）を作成すると、学校全体として取り組むことが可能になります。全体計画は「自校のキャリア教育の基本的な在り方を内外に示すとともに、学校の特色や教育目標に基づいたキャリア教育の教育課程への位置付けを明確にするものであり、キャリア教育を体系的に推進していくために欠かせないもの」（文部科学省,2011）です。

全体計画を作成するためには、幼稚園から高等部までそれぞれの段階における幼児児童生徒の実態把握を行い、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度」をどの段階において育てるかを明らかにし、教員間で共通理解をしていくことが必要になります。

さらに「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」を指導の中でどう関連させるか検討し、キャリア教育と指導を結び付け具体化して

いくことが大切です。

本研究では、「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター,2011）等に基づいて、この過程を整理し、キャリア教育を教育課程に位置付け、一貫した指導を行うために必要な手順を検討して、下記の4点に整理しました。

- 幼児児童生徒の発達の段階を適切に把握する
- 全体計画を作成する
- 段階表を活用し、キャリア発達を促す能力を明確にする
- キャリア教育と指導の関連を図る

この手順を参考に教育課程の改善を図ることにより、キャリア教育が指導の中で具体化し、学校全体としてキャリア教育の視点を基に一貫した教育活動が可能になると考えます。

II キャリア教育の視点で特別支援学校(視覚障害)の教育課程をとらえ直す手順

Step1

幼児児童生徒の発達の段階を適切に把握する

キャリア教育を教育課程や指導に関連付け、一貫した指導を行うためには、障害のある幼児児童生徒一人一人の発達の段階を適切に把握することが必要です。きめ細かな実態把握により、一人一人の状態を把握するためには、次にあげる3つの側面からとらえることが大切です。

多面的に全体像をとらえる

一人一人の幼児児童生徒の感じ方や考え方など内面的なことや得意なこと、生活環境なども含めて、多面的に幼児児童生徒の全体像をとらえます。

発達や環境等からとらえる

知的、言語、社会性、運動能力、視知覚などの発達の諸側面を環境などとの関係性も含めてとらえます。

過去から将来へ時間的な流れからとらえる

現在のことだけではなく、どのような学習や経験を通して今の力が付いているのか、これからどのような指導を通してどのような力を育てていくことが必要かなど、成長や発達を時間的な流れを考慮して把握し、将来を見通しつつとらえます。

また、実態把握に客観性をもたせ、より適切に行うには、多面的な情報の収集が必要になります。

多角的な情報収集の側面

- | | |
|--|--|
| <p>① 医学的な立場から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視機能、眼疾患、視覚補助具の処方
照明の程度、視覚管理面の内容 等 <p>② 心理面から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本人や保護者の障害に対する態度
心理的適応の状況、社会性、日常生活面の様子 等 | <p>③ 教育面から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使用文字、文字条件、教材・教具、
施設・設備 等 <p>④ 保護者から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生育歴、家庭環境、願い 等 |
|--|--|

さらに、視覚障害のある幼児児童生徒一人一人の障害の状態を考慮し実態把握を行うためには、幼児児童生徒の発達を規定する要因もとらえることが大切です。視覚障害の生理的・解剖学的要因について、また、行動の制限、視覚情報の欠如、視覚模範の欠如など、環境等の諸条件による発達を規定する要因についても適切に把握する必要があります。

発達を規定する要因1：生理的・解剖学的要因

- ① 視覚障害 ② 視覚障害以外の脳損傷などの疾病

発達を規定する要因2：環境条件の要因

- ① 行動の制限 ② 視覚情報の欠如 ③ 視覚模範の欠如

Step 2

全体計画を作成する

キャリア教育の「全体計画」は、学校の教育目標、幼児児童生徒の実態、教職員や保護者の願いを基に、次の項目について把握し、目指す幼児児童生徒の姿を具体化しながら作成します。

全体計画に構成する項目の例

- ・キャリア教育の目標
- ・各学部、学年の目標
- ・視覚障害教育における基礎的・汎用的能力（5つの能力）
- ・各教科等との関連する指導内容 等

等を踏まえ、目指す幼児児童生徒の姿を具体化しつつ作成します。全体計画の構造としては図10のように整理できます。

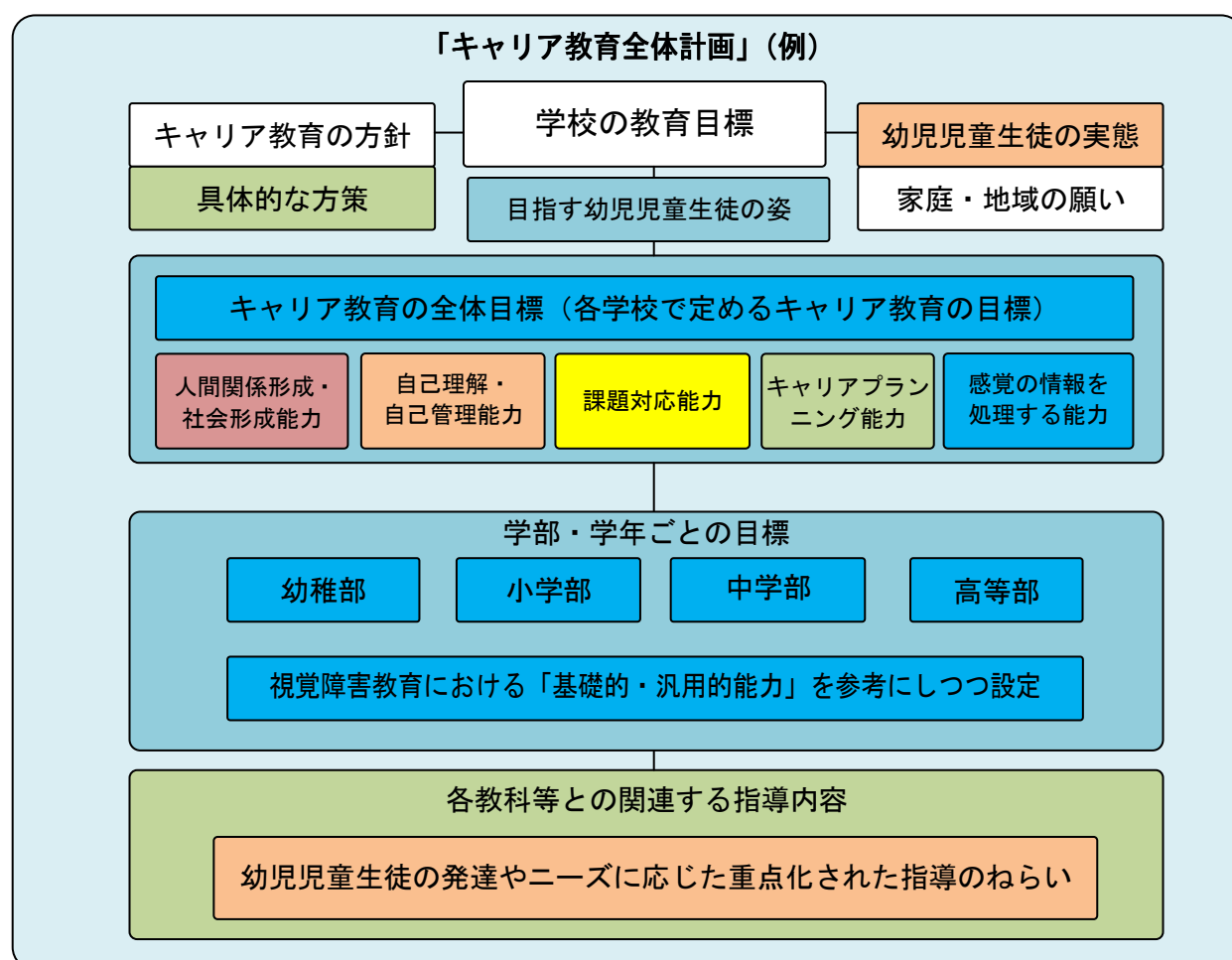


図10 キャリア教育全体計画

Step 4

キャリア教育と指導の関連を図る

キャリア教育と指導との関連を図るには、それぞれの指導の場面を「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力（5つの能力）の育成と結び付けることかできるか」という視点で見直すことが大切です。このように各教科等の指導内容を見ていくと、様々な場面で基礎的・汎用的能力を育む要素を見付けることができます。

ある学校では、小学部（高学年）段階において、自己理解・自己管理能力を「社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる」、キャリアプランニング能力を「将来のことを考える大切さが分かる」と具体化しました。このような能力を育む場面は、多くの教科の指導の中で関連付けすることができます。社会科、理科等の指導においても、これら具体化した能力を育む指導場面の設定が可能です。

視覚に障害のある幼児児童生徒一人一人に必要な基礎的・汎用的能力としての「感覚の情報を処理する能力」は、自立活動の指導とも密接に関連する能力です。ある学校では、「感覚の情報を処理する能力」を「自ら行動範囲を広げようとする」と具体化しました。この能力は、自立活動の時間の指導はもちろん、教育活動全体を通した自立活動の指導の中においても育成することができます。（図12）

このように、各教科等の指導の中で基礎的・汎用的能力を育む場面を見付け、「意味付け・関連付け」をすることによって、キャリア教育を教育活動の中に位置付けることができます。この視点を「キャリア教育の視点」といいます。

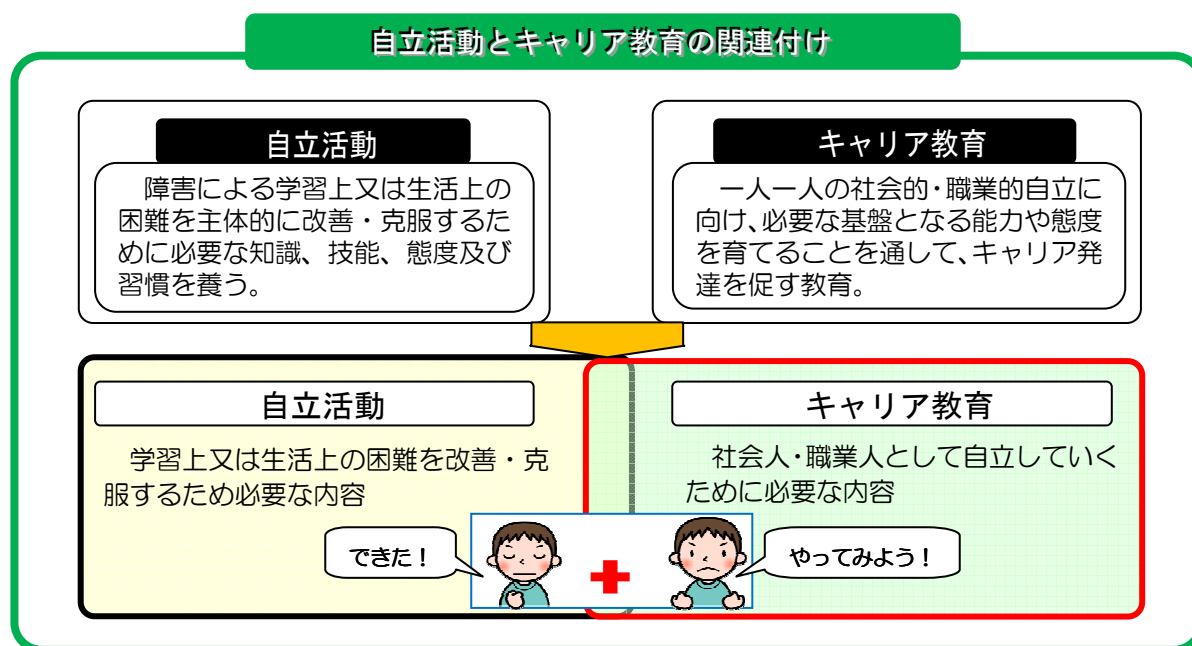


図12 自立活動の指導とキャリア発達を促す指導の関連付け

III 取組の実際

キャリア教育の視点で特別支援学校（視覚障害）の教育課程をとらえ直すための手順に沿って、実践を検討しました。

A 盲学校とB 盲学校のそれぞれの取組の実際の事例を取り上げて成果と重点化する事項を整理しました。

Step1 幼児児童生徒の発達の段階を適切に把握する

A 盲学校では、一人一人の幼児児童生徒の実態を把握するため、個々の視機能や眼疾患、視覚補助具の処方など医学的な側面や使用文字や設備・備品などの教育的な側面、また、本人や保護者の障害に対する態度、心理的検査などの心理面からとらえることにしました。個々の実態を踏まえて、5～7名のグループに分かれて発達の課題などの実態について協議しました。現在の状況、発達の状況など、各自が気付いた内容を1枚1項目として付箋紙に書き出し、その内容をカテゴリー化し、小見出しを付け、全体で共有し協議を進めました。

協議によって、幼児児童生徒の現在の課題や今後育みたい力を確認することができました。

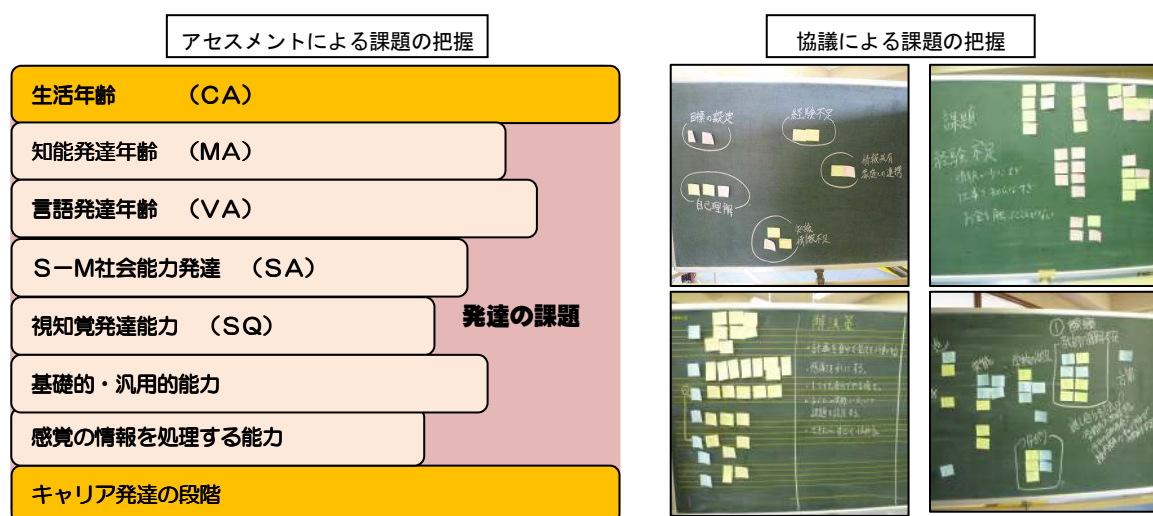


図1.3 一人一人の幼児児童生徒の課題と現状



取組の成果と 重点化する事項

- ・ 幼児児童生徒の実態を複数の教職員で多面的にとらえることができました。
- ・ 幼児児童生徒の発達の課題等を整理し、教職員間で共通理解することができました。
- ・ キャリア教育に取り組むに当たって、アセスメント等を活用しながら客観的に発達をとらえることや、一人一人について将来を見通しながら考えていくことが確認できました。

Step 2

全体計画を作成する

A 盲学校と B 盲学校は、幼児児童生徒の実態、保護者の願い、学校の教育目標等を踏まえ教職員間で検討し、全体計画を作成しました。

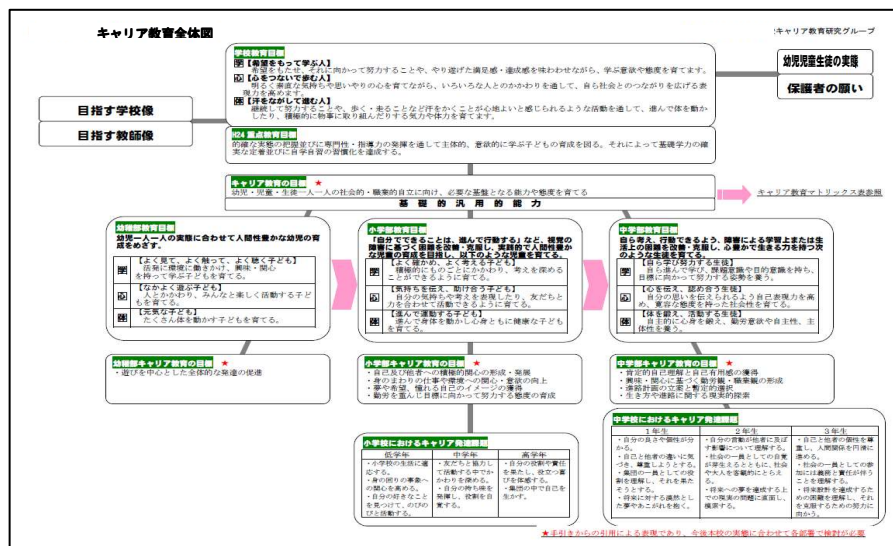


図 14 A 盲学校で作成した全体計画（案）

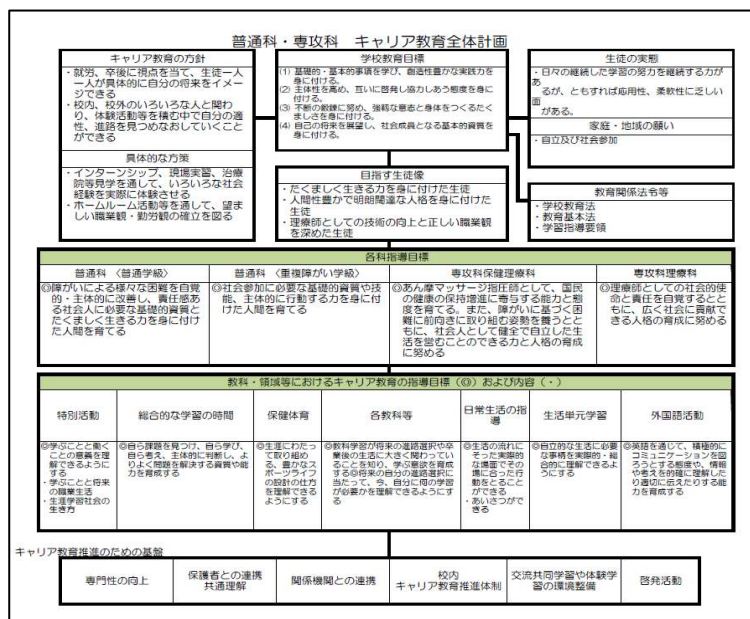


図 15 B 盲学校で作成した全体計画（案）

取組の成果と

重点化する事項

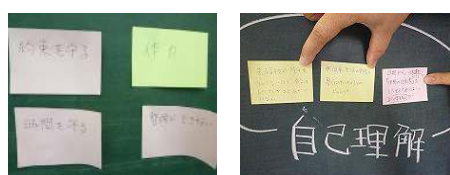
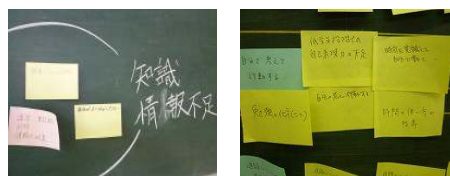
- ・全体計画を作成することで、段階ごとに必要な指導目標を明確にすることができました。
- ・幼稚部、小学部、中学部、高等部を見通し、一人一人に今後育んでいきたい力を教職員間で協議し、共通理解することが大切であると確認できました。

Step 3

段階表を活用し、キャリア発達を促す能力を明確にする

A盲学校では、全体計画、Step 1 で協議した幼児児童生徒の現状を基に学部の段階ごとに、キャリア発達を促す能力を付箋紙に書き出しながら協議をしました。

内容は関連する項目ごとにまとめ「段階表」に記載しました。



幼児児童生徒の実態等から育みたい能力について、付箋に記入し意見を出し合い、カテゴリーに分けました。



グループで出し合った育みたい能力を段階ごとに整理しました。

段階表		キャリア発達を促す能力		キャリア発達を促す能力
学級・学年	能力・段階	キャリア発達を促す能力	キャリア発達を促す能力	キャリア発達を促す能力
小学1年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
小学2年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
小学3年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
小学4年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
小学5年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
小学6年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
中学1年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
中学2年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
中学3年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
高校1年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
高校2年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力
高校3年生	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力	基礎的な学習能力

図 16 A盲学校で作成した段階表（試案）

育みたい能力をキャリア教育の視点に基づいて、段階表にまとめました。

取組の成果と

重点化する事項

- 指導の中でどのような能力や態度を育むべきかを段階表で具現化することにより教職員間で確認することができました。
- キャリア発達を促す能力について具体的に整理したことで、指導の中で5つの能力を育むための具体的な方法や位置付けるための考え方について整理する必要があると感じました。

Step 4

キャリア教育と指導の関連を図る

事例1

小学部5年 生活体験発表会

小学部5年生の学習活動「生活体験発表会」とキャリア教育との関連をキャリア教育の視点を基に関連を図り、指導目標の達成とともに、「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力（5つの能力）」の育成を図る指導を行いました。

生活体験発表会の目標と内容は、次のように設定しました。

目 標

相手や目的に応じ、考えたことや伝えたいことなどについて、丁寧な言葉を用いるなど、的確に話す能力、相手の意図をつかみながら聞く能力を身に付けさせるとともに、意欲的に話したり聞いたりしようとする態度を育てる。

内 容

- (1) 夏休み中の生活体験などについて集団の前で発表する。
- (2) 友達の体験発表を、興味をもちながら落ち着きをもって聞く態度を身に付けさせる。

キャリア教育の視点を基に指導を見直していくことにしました。小学部高学年段階の「視覚障害教育における基礎的汎用的能力（5つの能力）」は、作成した「段階表」によると次の通りです。



能力	基礎的汎用的能力	キャリア教育
人間関係形成・社会形成能力	相手の話を聞く時のマナーを身に付けようとする。	施設・職場見学等を通し、働くことの大切さや苦労を理解しようとする。
自己理解・自己管理能力	目的や目標をもち、必要な努力を続けようとする。	自分の果たす義務や責任について、意識したり話し合いをしたりしようとする。
課題対応能力	自分の得意なことを集団の中で積極的に行おうとする。	各種補装具を知り、必要に応じて使おうとする。
キャリアプランニング能力	時間的な見通しをもって行動しようとする。	白杖を有効に活用して情報を得ながら、安全に歩こうとする。
感覚の情報を処理する能力	やることが分かり落ち着いて行動しようとする。	文章を読み書きする中で表記のきまりを知ろうとする。

人間関係形成・社会形成能力

- ・場に合った言葉遣いをしようとする。
- ・人の話を聞く時のマナーを身に付けようとする。
- ・思いやりをもち、相手の立場に立って考え行動しようとする。

自己理解・自己管理能力

- ・目的や目標をもち、必要な努力を続けようとする。
- ・自分らしさを発揮し、人に認めてもらおうとする。

課題対応能力

- ・自分の得意なことを集団の中で積極的に行おうとする。
- ・時間的な見通しをもって行動しようとする。
- ・やることが分かり落ち着いて行動しようとする。

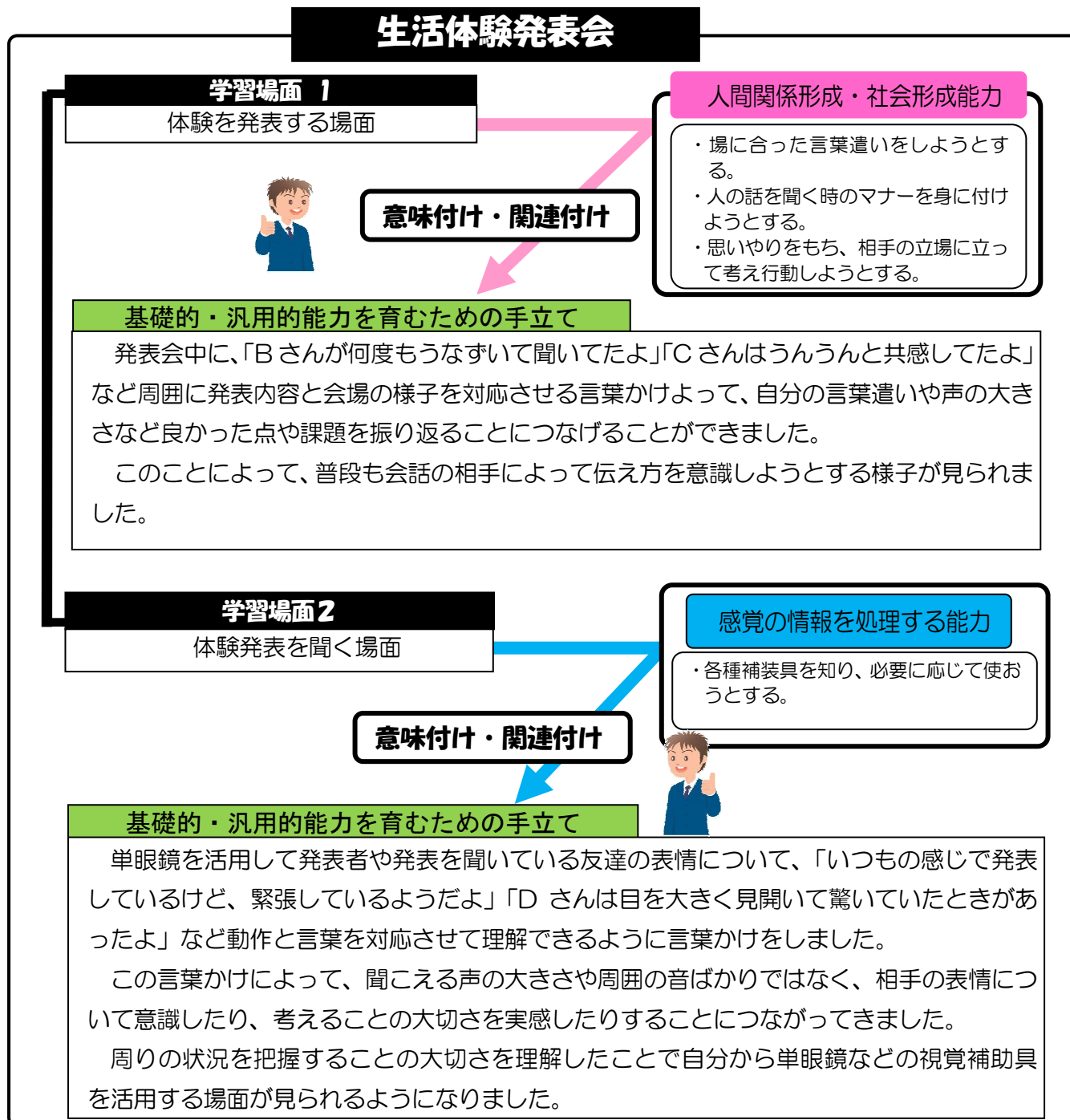
キャリアプランニング能力

- ・施設・職場見学等を通し、働くことの大切さや苦労を理解しようとする。
- ・自分の果たす義務や責任について、意識したり話し合いをしたりしようとする。

感覚の情報を処理する能力

- ・各種補装具を知り、必要に応じて使おうとする。
- ・白杖を有効に活用して情報を得ながら、安全に歩こうとする。
- ・文章を読み書きする中で表記のきまりを知ろうとする。

次に、学習活動を「視覚障害教育における基礎的汎用的能力（5つの能力）」から育成の場面を見付け、「意味付け・関連付け」*を図ることにしました。



*「意味付け・関連付け」

ここでの「意味付け・関連付け」とは、指導者が学習場面の中に「基礎的・汎用的能力」の育成と関連する内容を見いだす、あるいは設定して、授業において、キャリア教育としての意味を認識した指導を行うことと押さえています。

このことによって、幼児児童生徒個々が学習や生活の経験を「自己」と「働くこと」に結び付けながら、「意味付け・価値付け」や「関連付け」したりして、キャリアを形成していくことにつながると考えます。

事例2

中学部1年 数 学

中学部1年生「数学」について、キャリアの視点を基に「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力（5つの能力）」と「意味付け・関連付け」を例示しました。

目 標

具体的な事象の考察を通して、比例、反比例の意味を理解する。

内 容

事象の中にある2つの数量の関係に関心を持ち、身のまわりから伴って変わる2つの数量を見付ける。

学習場面 1

事象から2つの数量を見付ける場面

意味付け・関連付け

自己理解・自己管理能力

- ・自らの考えを絶えず見直し、検討しようとする。

基礎的・汎用的能力を育むための手立て

生徒が「考えたこと」について、レポートにまとめ、発表しました。振り返りができるように生徒同士で話し合い、次に友達の考えた内容を知る場面を設定しました。

生徒自ら友達の意見を知ることで、自分の考えを伝え、自分のものの考え方を見直す様子が見られました。普段の話題についても生徒同士で感想や意見を述べ合う場面が見られるようになりました。

学習場面 2

事象について2つの数量から関係を見いだす場面

意味付け・関連付け

課題対応能力

- ・援助を受けずにできる事柄が分かり、行おうとする。
- ・課題に積極的に取り組み、主体的に解決していこうとする。

基礎的・汎用的能力を育むための手立て

ペアになり、事象について2つの変化する数値や数量のグラフを作成する場面を設定しました。グラフの作成や発表等の役割分担を話し合いによって決めることにより、自分の担当する役割を理解し、積極的に取り組むことができました。

学習場面 3

事象について実験と観察を行う場面

意味付け・関連付け

感覚の情報を処理する能力

- ・安全にまたは、効率よく作業を行うための補助具を知り、活用しようとする。

基礎的・汎用的能力を育むための手立て

水槽に予め目盛りを付けたり、音で水位が確認できるように教材の工夫をしました。

生徒が補助具を活用することで、小さな変化でも気付くことができ、友達と同じタイミングで驚いたり、事象の変化に共感したりすることができました。

事例3

高等部3年 インターンシップ（就業体験）

キャリア発達を促す重要な、「インターンシップ（就業体験）」についての事例です。
インターンシップ（就業体験）は事前・事後の学習を通して、「意味付け・関連付け」を図ることで、「視覚障害教育における基礎的・汎用的能力（5つの能力）」を育みます。

目 標

- (1) 職業に対する視野を拡大し、自己を見つめ、自己の将来を考える。
- (2) 自己実現のために必要な知識や経験をどのようにして得るかを具体的に考える。

内 容

- (1) 将来進む可能性のある仕事や職業に関連する活動を試行的に体験するため関連する事業所について調査する。
- (2) 職業観・勤労観の形成と確立のために、インターンシップ（就業体験）を行う。

学習場面 1

生徒が事業所の担当者と事前の打ち合わせをする場面

意味付け・関連付け

人間関係形成・社会形成能力

- ・場に応じた適切なコミュニケーションを図ろうとする。
- ・新しい環境や人間関係を生かそうとする。
- ・他者の価値観や個性を理解し、自分との差異を認めつつ受容する。

基礎的・汎用的能力を育むための手立て

初めて会う人に電話や文書で依頼する経験を通して、普段とは違った言葉遣い、声の大きさについて考える機会となりました。実習終了後も声の大きさを意識したり、場に応じた適切なコミュニケーションについて考えたりすることにつながりました。

学習場面 2

就業体験先について調べる場面

意味付け・関連付け

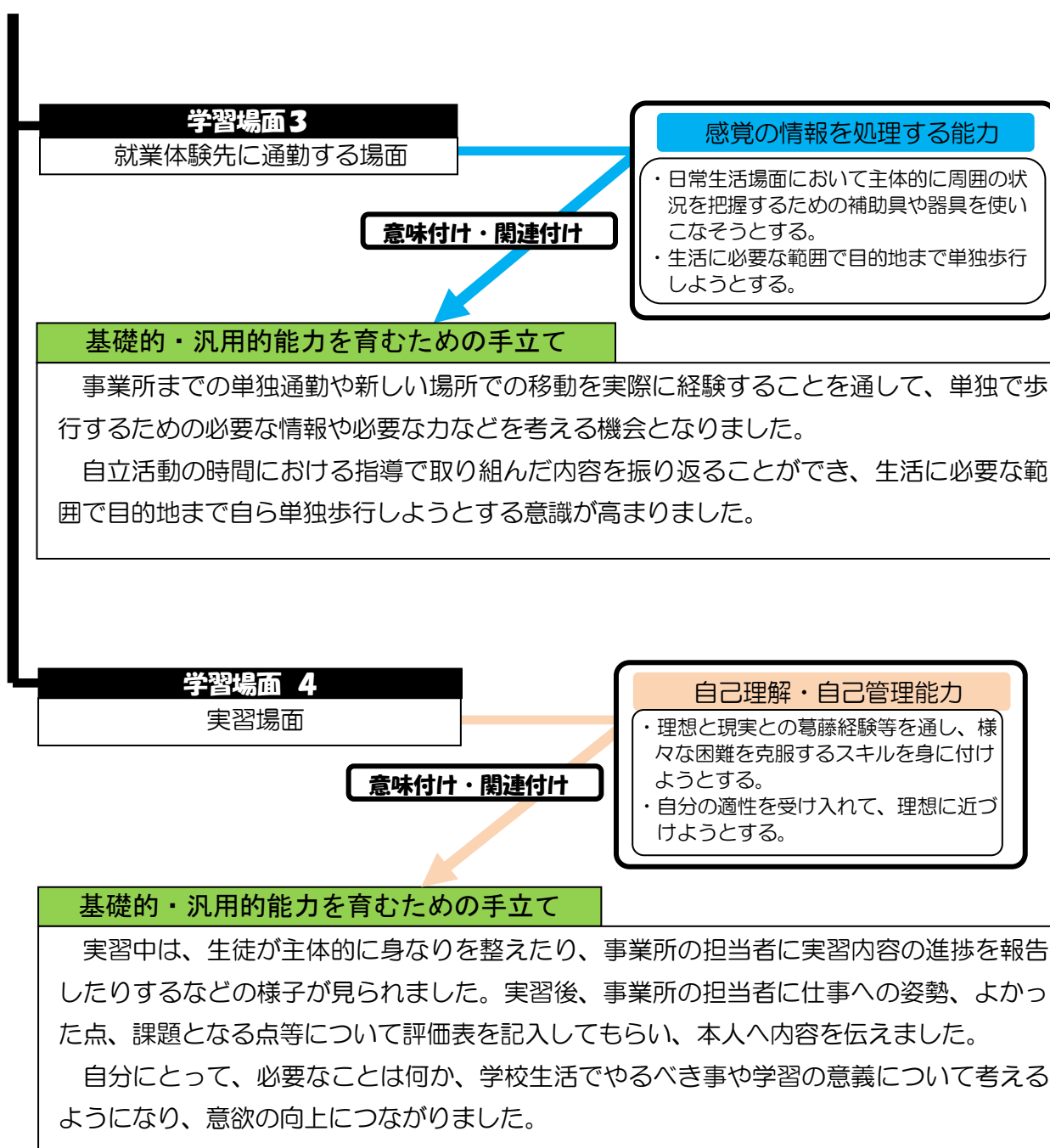
課題対応能力

- ・自分の課題や目標が分かり、実際の場面で自らその達成に向けて努力しようとする。
- ・自分の課題や目標に向けて、情報を活用しながら実際場面を通じて評価をし、次の課題に向けた計画を立てようとする。

基礎的・汎用的能力を育むための手立て

コンピュータ等の情報機器などを活用して情報収集できるように視覚補助具を整えたり、必要な資料を図書室や学級に掲示したり、進路だよりに必要な情報を掲載したりするなど、生徒が情報を入手しやすいように学習環境を整えました。

生徒がこれまで希望していた就業体験先以外について調べるなど、様々な職業に関する興味・関心をもつようになりました。生徒が自ら情報を収集し、活用しながら、目標や課題解決に向かう様子が見られるようになりました。



IV まとめ

1 本研究の構造

本研究では、将来の自立と社会参加につながる一貫した教育の充実を図るため、理論研究や各学校での取組の実際から、必要な手順として大きく4つに整理しました。各 Step を順に踏まえて、教育課程への位置付けや指導との関連性を図る方策を検討しました。次図は、その構造を示したものです。

将来の自立と社会参加に向けた一貫した教育の充実のために

- Step1 幼児児童生徒の発達の段階を適切に把握する
- Step2 全体計画を作成する
- Step3 段階表を活用し、キャリア発達を促す能力を明確にする
- Step4 キャリア教育と指導の関連を図る



4つのStepを基に、教育課程に位置付け、指導の改善・充実を図ります。

1 幼児児童生徒の発達の段階を適切に把握する

Step1

多面的に全体像をとらえる

発達や環境等からとらえる

過去から未来へ時間的な流れからとらえる



① 医学的な立場から

- ・視機能、眼疾患、視覚補助具、照明の程度、視覚管理面の内容

② 心理面から

- ・本人や保護者の障害に対する態度、心理的適応の状況、社会性、日常生活面の様子

③ 教育面から

- ・使用文字、文字条件、教材・教具、施設・設備

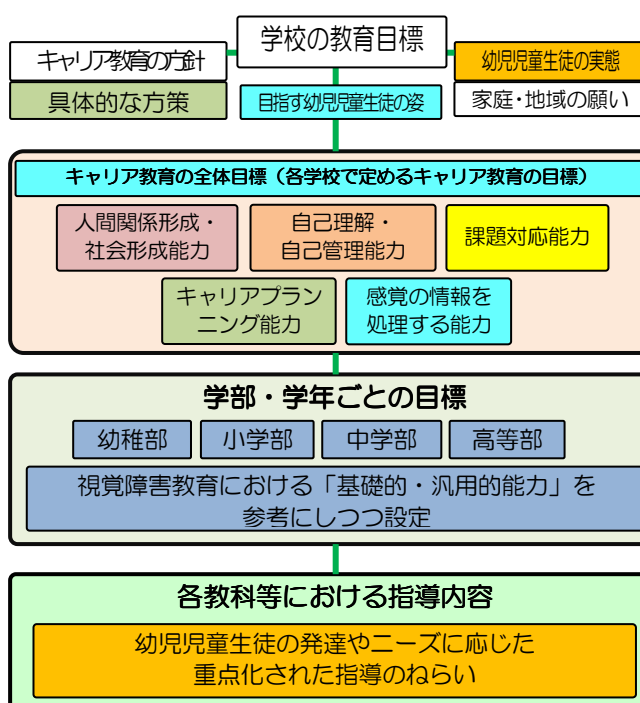
④ 保護者から

- ・生育歴、家庭環境、願い

研究の成果

2 全体計画を作成する

Step2



「キャリア教育の全体計画（例）」 P. 25

視覚障害教育における「基礎的・汎用的能力」(5つの能力)

基礎的・汎用的能力

人間関係形成・
社会形成能力

自己理解・
自己管理能力

課題対応能力

キャリアプランニング能力

感覚の情報を
処理する能力

視覚に障害がある幼児児童生徒にとって、社会人・職業人として自立していくために必要な基盤となる能力や態度

3

段階表を活用し、キャリア発達を促す能力を明確にする

4

キャリア教育と指導の
関連を図る

Step3

視覚障害教育で育みたい5つの能力を柱に、段階表などを基に記述します。

全体計画や実態を踏まえ、幼児児童生徒が、主体的に能力を伸ばすことができる記述になっているかについて注意しながら記載します。

5つの能力について、それぞれの発達の段階に応じた育みたい能力や態度を記述します。

能力	発達段階	育成目標
人間関係形成・社会形成能力	1. 自分と他者の違いを認識し、尊重する態度を養う。 2. 他者と協力して課題を解決する能力を養う。	1. 自分と他者の違いを認識し、尊重する態度を養う。 2. 他者と協力して課題を解決する能力を養う。
自己理解・自己管理能力	1. 自分の長所・短所を認識し、自己管理能力を養う。 2. 自分の将来の夢や目標を明確にする能力を養う。	1. 自分の長所・短所を認識し、自己管理能力を養う。 2. 自分の将来の夢や目標を明確にする能力を養う。
課題対応能力	1. 課題を認識し、解決策を模索する能力を養う。 2. 課題を解決するための計画を立て、実行する能力を養う。	1. 課題を認識し、解決策を模索する能力を養う。 2. 課題を解決するための計画を立て、実行する能力を養う。
キャリアプランニング能力	1. 職業の役割や責任を理解し、職業観を養う。 2. 職業選択の基準を明確にする能力を養う。	1. 職業の役割や責任を理解し、職業観を養う。 2. 職業選択の基準を明確にする能力を養う。
感覚の情報を処理する能力	1. 感覚の情報を正確に認識し、理解する能力を養う。 2. 感覚の情報を活用して課題を解決する能力を養う。	1. 感覚の情報を正確に認識し、理解する能力を養う。 2. 感覚の情報を活用して課題を解決する能力を養う。

表「視覚障害教育におけるキャリア発達を促す能力や態度を示す段階表」

Step4

各教科等の指導とキャリア発達を
促す指導の関連付け

学習活動

学習活動の中に基礎的・汎用的能力を育成する場面はないか

意味付け
関連付け

基礎的・
汎用的能力

基礎的・汎用的能力を育むための手立て

基礎的・汎用的能力を育成するために、学習活動の中で取り組んだほうがよいこと

指導と関連させ、具体化する

自立活動とキャリア教育の関連付け

自立活動

障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養う。

キャリア教育

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育。

自立活動

学習上又は生活上の困難を改善・克服するため必要な内容

キャリア教育

社会人・職業人として自立していくために必要な内容

できた！



やってみよう！

「視覚障害教育におけるキャリア発達を促すための能力や態度の段階表（試案）」 P. 26

具体的な取組例 事例1～3 P. 17～21

2 全体計画・段階表(試案)について

本研究では、取組の実際として、A盲学校、B盲学校の全体計画、段階表を一部掲載していますが、今後の一貫した教育の充実を図る上では、幼稚部から高等部、専攻科までを見通したキャリア教育の全体計画、段階表が必要であると考えます。そこで研究の成果の一つとして研究協力校における取組を基に、文献を参考にしつつ「キャリア教育の全体計画(例)」、「段階表(試案)」を作成しました。

特に、「段階表(試案)」の内容等は、各学校において、段階表を検討する際に参考にさせていただけるように、「小学校キャリア教育の手引き・中学校キャリア教育の手引き・高等学校キャリア教育の手引き」(文部科学省,2011、2012)、「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育推進について(調査研究報告書)」(国立教育政策研究所生徒指導研究センター,2002)などの文献及び研究協力校の「段階表」を参考に、幼稚部から高等部まで一貫して検討しました。

また、視覚障害教育において必要な能力として設定した「感覚の情報を処理する能力」は、視覚障害がある幼児児童生徒のキャリア発達を促すための能力を考えるに当たって、視覚障害のある幼児児童生徒の発達の特性をとらえることを大切にしました。「段階表」に示した項目は、「広D-K式視覚障害児用発達診断検査」(五十嵐,1994)、「視覚障害児の発達と学習」(文部省,1984)、「歩行指導の手引き」(文部省,1985)を参考に、研究協力校の実践を基に検討・整理しています。

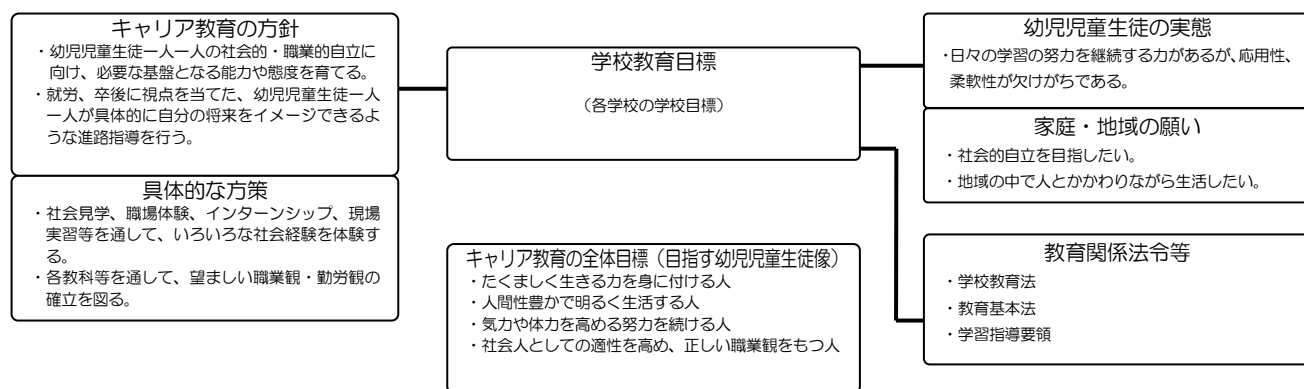
3 本研究の成果

- (1) キャリア教育を特別支援学校(視覚障害)の教育課程に位置付けるために必要な手順について、整理しました。
- (2) 視覚障害教育におけるキャリア発達を育成する諸能力を示し、小学部、中学部、高等部、各段階の指導とキャリア教育との関連について実践を基に検討し、事例を掲載しました。
- (3) 幼稚部から高等部、専攻科までキャリア教育の視点を基に一貫した指導を行うために必要な「キャリア教育の全体計画(例)」と「視覚障害教育におけるキャリア発達を促すための能力や態度の段階表(試案)」を作成しました。

4 今後の課題

「キャリア教育の全体計画(例)」と「視覚障害教育におけるキャリア発達を促すための能力や態度の段階表(試案)」をキャリア教育の視点による一貫した教育活動の改善・充実のために、実践を通して検証、改善していく必要があります。また、本研究では、発達の段階を適切に把握するという過程を重視し、実態把握の大切さに言及していますが、一人一人の指導とキャリア教育との関連性を図る実践については、さらに研究を進めていく必要があります。特に、個別の指導計画との関連を図り、一人一人のキャリア発達との関係性について研究をより深めることが必要です。

「キャリア教育の全体計画（例）」



指導目標						
幼稚園 ・遊びを中心として全体的な発達を促す。	小学部低学年 ・友達づくりを中心に、自分やまわりの友達などに関心を高め、自分の役割や身のまわりの仕事に一生懸命にかかわろうとする態度を養う。	小学部中学年 ・様々な働く人と積極的にかかわる中で、学ぶことや働くことの大切さや苦労が分かり、自分のよさを生かした学習や活動を行おうとする態度を育てる。	小学部高学年 ・いろいろなことに挑戦したり、学んだりして、夢を描くことの楽しさ・大切さに気づき、夢や希望をぶくましながら自分の能力を高め、計画的に生きようとする意欲や態度を育てる。	中学部 ・自らの興味・関心に基づき、職場体験学習等を通し、勤労観・職業観を育てるとともに、社会における役割や将来の生き方等を考えさせ、目標を立て、計画的に取り組む態度を育てる。	高等部普通科 ・障害による様々な困難を自主的・主体的に改善し、責任感ある社会に必要な基礎的資質とたくましく生きる力を身に付ける意識や態度を育てる。	高等部専攻科 ・理療師としての社会的使命と責任を自覚するとともに、広く社会に貢献できる人格の育成に努める。

教科・領域等におけるキャリア教育の指導目標【幼・小・中学部】							
特別活動 ○ 協力し合う態度やその基礎を培う。 ○ 役割や責任を果たそうとする態度を育てる。	総合的な学習の時間 ○ 学び方やものの考え方を身に付ける。 ○ 地域や自分の身近な社会について知る。	道徳の時間 ○ 約束やきまりを守り、すべきことをしっかり行う。 ○ 自分の良さを伸ばそうとする。 ○ 相手の立場に立って考える大切さがわかる。 ○ 将来への夢や希望をもつ。	各教科 ○ 学習が将来の生活や職業に関連していることを知り、学ぶ意欲につなげる。 ○ 興味・関心・好きなことに自分から取り組む姿勢を育む。	日常生活の指導 ○ 一人一人に応じた支援を受けながら、基本的な生活習慣の確立ができる。 ○ 集団生活に必要なあいさつをしたり、きまりを守ったりすることができる。	生活単元学習 ○ 生活に結びついた活動を通して、自分で決めて取り組んだり、主体的に取り組んだりする態度を育む。 ○ 体験活動で人とかかわりや、気持ちの伝え方を知る。	外国語活動 ○ 言語や文化の違いを知り、多様なものの見方や考え方ができることを知る。 ○ コミュニケーションの大切さや楽しさを知る。	自立活動の時間 ○ コミュニケーション意欲を育て、積極的に人間関係を築こうとする。 ○ 視覚補助具、視覚代行機器を活用し、主体的に生活しようとする。

教科・領域等におけるキャリア教育の指導目標【高等部】							
特別活動 ○ 学ぶことと働くことの意義を理解する。	総合的な学習の時間 ○ 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する。	各教科 ○ 教科学習が将来の進路選択や卒業後の生活に大きくかかわっていることを知り、学ぶ意欲につなげる。	日常生活の指導 ○ 一人一人に応じた支援を受けながら、主体的に日常生活ができる。 ○ 集団生活に必要なあいさつやきまりを守ることができる。	生活単元学習 ○ 生活に結びついた活動を通して、自分で決めて取り組んだり、主体的に取り組んだりする態度を育む。 ○ 体験活動で人とかかわりや、気持ちの伝え方を知る。	外国語活動 ○ 英語を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を伸ばす。	自立活動の時間 ○ 他者とのコミュニケーションを円滑に取ることができ、よりよい人間関係を築こうとする。 ○ 生活場面で視覚補助具、視覚代行用具を有効に活用できる。	

視覚障害教育におけるキャリア発達を促す能力や態度の段階表（試案）

		幼稚園	小学部			中学部	高等部
			低学年	中学年	高学年		
キャリア発達の段階		人間関係基盤形成の時期	進路の探索・選択にかかわる基盤形成の時期			現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
視覚障害教育の視点から キャリア教育を貫く教育活動		意図的直接的な模倣や体験による活動			集団における自他の理解を促す活動		社会生活の場면을想定した活動
人間関係・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えようとするとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成しようとする力	・同年齢の友達と会話しようとする。	・自分の考えを相手に伝えようとする。	・自分の考えをみんなの前で話そうとする。	・場に合った言葉遣いをしようとする。	・気持ちや考えを動作や言葉、文字を駆使し、分かりやすく伝えようとする。	・場に合った適切なコミュニケーションを図ろうとする。
		・相手の方向を意識して、話したり、聞いたりしようとする。	・他人と自分との感じ方や考え方の違いを理解しようとする。	・他者の話を集中して聞こうとする。	・人の話を聞く時のマナーを身に付けようとする。	・新しい環境や人間関係に適応しようとする。	・新しい環境や人間関係を生かそうとする。
		・「ありがとう」や「ごめんなさい」を言おうとする。	・あいさつや返事をしようとする。	・周囲の状況を理解したり自分のしたいことを伝えたりしようとする。	・思いやりをもち、相手の立場に立って考え行動しようとする。	・相手に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。	・他者の価値観や個性を理解し、自分との差異を認めつつ受容する。
		感謝・あいさつ・返事をしようとする		協力・信頼しようとする	場面や目的に応じたコミュニケーションをしようとする		
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力	・自分から働きかけて友達と遊ぼうとする。	・自分のできることを積極的に行おうとする。	・自分で目標に向かっていこうとする。	・目的や目標をもち、必要な努力を続けようとする。	・社会の一員としての参加には義務と責任が伴うことを理解しようとする。	・理想と現実との葛藤経験等を通し、様々な困難を克服するスキルを身に付けようとする。
		・衣服の着脱、食事、排せつを自分でしようとする。	・自分のことは自分でしようとする。	・自分のやりたいこと、良いと思うことなどを考え、進んで取り組もうとする。	・自分らしさを発揮し、人に認めてもらおうとする。	・自らの考えを絶えず見直し、検討しようとする。	・自分の適性を受け入れて、理想に近づこうとする。
			・体調の良い状態や悪い状態を具体的に表現しようとする。	・眼の疾患などにより、気を付けなければならない姿勢や事柄が分かり日常的に行おうとする。		・場に合った服装を選び、身なりを整えようとする。	
		自分で考え自分で行動しようとする		働くことの意義を理解しようとする	就業体験を通して自己の生き方を考えようとする		
課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決しようとする力	・自分の好きなことに集中する。	・約束やきまりを守ろうとする。	・自分で考え行動しようとする。	・自分の得意なことを集団の中で積極的に行おうとする。	・援助を受けずにできる事柄が分かり、行おうとする。	・自分の課題や目標が分かり、実際の場面で自らその達成に向けて努力しようとする。
		・自分でできることを増やそうとする。	・時間を意識して行動しようとする。	・活動に対する見通しをもち、行動しようとする。	・時間的な見通しをもって行動しようとする。	・課題に積極的に取り組み、主体的に解決していこうとする。	・自分の課題や目標に向けて、情報を活用しながら実際場面を通じて評価をし、次の課題に向けた計画を立てようとする。
		・作業の準備や片づけをしようとする。	・計画作りの必要性に気づき、作業の手順を考えようとする。	・やることが分かり落ち着いて行動しようとする。	・選択の意味や判断・決定の過程、結果には責任を伴うことを理解しようとする。		
		決まりや役割を理解しようとする		計画することを覚え・自分の役割を理解しようとする	将来設計と社会貢献の調和を図ろうとする		
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力	・自分でしたい遊びを自分で選んで遊ぼうとする。	・身近で働く人々に興味関心をもとうとする。	・将来の夢や希望をもつ。	・施設・職場見学等を通し、働くことの大切さや苦勞を理解しようとする。	・体験等を通して、勤勞の意義や働く人々の様々な思いを理解しようとする。	・将来設計に基づいて、今取り組むべき学習や活動を理解しようとする。
		・大人の手伝いをしようとする。	・係や当番の活動に組み、それらの大切さを知ろうとする。	・決まった役割をやり遂げようとする。	・自分の果たす義務や責任について、意識したり話し合いをしたりしようとする。	・日常生活や学習と将来の生き方との関係を理解しようとする。	・自らの能力・適性を的確に判断し、自らの将来設計に基づいて、卒業後の進路について決定しようとする。
				・いろいろな職業や生き方があることを知ろうとする。	・憧れとする職業をもち、自分で必要な情報を探そうとする。	・生き方や進路に関する情報を様々なメディアを通して、調査・収集し活用しようとする。	
		働くことを知ろうとする	責任をもって行なおうとする	将来展望をもとうとする	課題解決に取り組もうとする	進路実現に向け準備をする	
感覚の情報処理能力	保有する感覚を利用し、環境と自己との関係を理解して、的確な判断や行動ができる力 自らのリテラシーを深め、情報機器を含めた補助具を活用する力	・環境に興味をもち、自ら探索しようとする。	・できること、できないことを考え、援助依頼しようとする。	・視覚の損失により、できないことを他の手段に置き換えられることを知ろうとする。	・各種補装具を知り、必要に応じて使おうとする。	・安全にまたは、効率よく作業を行うための補助具を知り、活用しようとする。	・日常生活場面において主体的に周囲の状況を把握するための補助具や機具を使いこなそうとする。
		・介添歩行により、自分の力で歩こうとする。	・介添歩行で歩いている場所の変化や周囲の様子を知ろうとする。	・歩行時に白杖を使用することにより、いろいろな情報を得ようとする。	・白杖を有効に活用して情報を得ながら、安全に歩こうとする。	・交通機関を利用しようとする。	・生活に必要な範囲で目的地まで単独歩行しようとする。
		・音の聞こえる方向に手を伸ばして触ろうとする。	・主体的に物に触れ、大小、多少、長短、重軽の違いを知ろうとする。	・点字に興味をもち、文章の続きに期待をもって自ら進んで読もうとする。	・文章を読み書きする中で表記のきまりを知ろうとする。	・パソコンなどの機器の使い方を学び有効に活用しようとする。	・各種の情報を収集したり検索したりするなどインターネットを活用しようとする。
		外界からの働きかけに興味をもつ		的確な概念形成	行動範囲の拡充	新たな環境への適応	

※ 視覚障害児・者の特性から職業的（進路）発達にかかわる諸能力には欠かせない領域を「感覚の情報を処理する能力」として位置付けた。

引用文献

- 1) 中央教育審議会(1999) 初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申).
- 2) 中央教育審議会(2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申).
- 3) 中央教育審議会(2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告).
- 4) 北海道立特殊教育センター(1998) 個別の指導計画の作成と活用.
- 5) 海津亜希子(2012) 個別の指導計画作成ハンドブック第2版, 日本文化科学社.
- 6) 文部科学省(2006) 小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引 一児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために一.
- 7) 文部科学省 国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2011) キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書.
- 8) 文部科学省(2010) 生徒指導提要.
- 9) 文部科学省(2011) 小学校キャリア教育の手引き.
- 10) 文部科学省(2011) 中学校キャリア教育の手引き.
- 11) 文部科学省(2012) 高等学校キャリア教育の手引き.

参考文献

- 1) 相川満(2000) 人づきあいの技術ー社会的スキルの心理学 セレクション社会心理学20, サイエンス社.
- 2) 中央教育審議会(2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告).
- 3) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2011) 特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック, シアース教育新社.
- 4) 五十嵐信敬(1994) 目の不自由な子どもの感覚教育百科, コーレル社.
- 5) 五十嵐信敬(2005) 5版 視覚障害幼児の発達と指導, コレール社.
- 6) 黒崎恵津子(2005) 視覚障害者にかかわるしごと事典, 大活字.
- 7) 北海道教育委員会(2008) 特別支援教育に関する基本方針.
- 8) 北海道視覚障害教育研究会(2006) 平成18年度研究紀要.
- 9) 北海道視覚障害教育研究会(2011) 平成23年度研究紀要.
- 10) 稲本正法(1996) 弱視レンズガイド, コーレル社.
- 11) 伊藤友治(1997) 視覚障害児の教育, 浜松盲学校.
- 12) 香川邦生・千田耕基編(2009) 小・中学校における視力の弱い子の学習支援 通常の学級を担当される先生方のために, 教育出版.
- 13) 香川邦生編著(2010) 視覚障害教育に携わる方のために【四訂版】, 慶應義塾大学出版社.
- 14) 文部科学省(2008) 学校教育法施行規則.

- 15) 文部科学省(2009) 特別支援学校幼稚部教育要領.小学部・中学部学習指導要領.高等部学習指導要領.
- 16) 文部科学省(2009) 特別支援学校学習指導要領解説総則編(幼稚部・小学部・中学部).
- 17) 文部科学省(2009) 特別支援学校学習指導要領解説総則編(高等部).
- 18) 文部科学省(2009) 特別支援学校学習指導要領解説自立活動編(幼稚部・小学部・中学部・高等部).
- 19) 文部省(1975) 養護・訓練指導事例集 - 視覚障害教育編 -, 東山書房.
- 20) 文部省(1984) 視覚障害児の発達と学習, ぎょうせい.
- 21) 文部省(1985) 歩行指導の手引き.
- 22) 文部省(1987) 視覚障害児のための言語の理解と表現の指導.
- 23) 森田浩司(2008) 視覚に障害のある者のキャリアガイダンスの在り方についてー職業生活の実際と学校段階における職業的自立を促す目標設定の検証ー, 平成18年度国立特別支援教育総合研究所長期研修成果報告書.
- 24) 小原直哉(1997) 盲学校の養護・訓練の指導内容の系統的な選択に関わる研究ー盲児及び知的な遅れのある盲児を対象としてー, 平成5年度国立特別支援教育総合研究所長期研修成果報告書.
- 25) 大河原潔・香川邦生・瀬尾政雄・鈴木篤・千田耕基編(1999) 視力の弱い子どもの理解と支援, 教育出版.
- 26) 坂本洋一(2007) 改訂 視覚障害リハビリテーション概論, 中央法規.
- 27) 澤田真弓(2004) 中途視覚障害者への点字触読指導マニュアル, 読書工房.
- 28) 芝田裕一(2007) 視覚障害児・者の理解と支援, 北大路書房.
- 29) 視覚障害教育実践研究会編(1995) 視覚障害教育情報ガイド, コレール社.
- 30) 視覚障害者調理指導研究会(2003) 視覚障害者の調理指導, 日本盲人福祉研究会.
- 31) 職業教育・進路指導研究会(1998) 職業教育及び進路指導に関する基礎的研究(最終報告).
- 32) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議(2003) 今後の特別支援教育の在り方について(最終報告).
- 33) 谷合侑(2002) 点字技能ハンドブック 改訂版, 視覚障害者支援総合センター.
- 34) 鳥山由子(2005) 視覚障害学生サポートガイドブック, 日本医療企画.
- 35) 氏間和仁(2006) 音声ユーザーへのパソコン導入期指導プログラム, 読書工房.
- 36) 吉原一夫(1985) 視覚障害者のそろばん指導法.
- 37) 全国盲学校長会(2000) 視覚障害教育入門Q&A, ジアース教育新社.
- 38) 全国特別支援学校知的障害教育校長会(2010) 新しい教育課程と学習活動Q&A特別支援教育[知的障害教育], 東洋館出版社.
- 39) 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議(2001) 21世紀の特殊教育の在り方についてー一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方についてー(最終報告).

抄 録

分類記号	主 題 名	特別支援教育の推進に関する研究		
I 1－0 1		視覚障害教育における自立と社会参加を見据えた指導の在り方に関する研究 ～キャリア教育の視点による教育活動の改善・充実～		
北海道立特別支援教育センター		平成25年3月	30ページ	
本研究は、視覚に障害のある幼児児童生徒の教育活動について、将来の自立と社会参加につながる一貫した教育の充実を図るため、理論研究や各学校での取組の実際から、必要な手順として4つに整理し、キャリア教育の教育課程への位置付けや指導との関連性を図る方策を提示した。 そして、視覚障害教育におけるキャリア発達を育成する諸能力を示し、小学部、中学部、高等部それぞれの指導とキャリア教育との関連について実践を基に検討し、実践事例を掲載した。 また、幼稚部から高等部、専攻科までキャリア教育の視点を基に一貫した指導を行うために必要な「キャリア教育の全体計画（例）」と「視覚障害教育におけるキャリア発達を促すための能力や態度の段階表」（試案）を作成した。				
キーワード	視覚障害、キャリア教育、キャリア発達、実態把握、基礎的・汎用的能力、自立活動、感覚の情報を処理する能力、指導の関連付け、キャリア教育全体計画、一貫した指導			

あ と が き

本号に収録されました研究成果は、当センターの研修講座等で活用します。
また、当センターのホームページに研究紀要の全文を掲載します。

<http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/>

特別支援教育の推進に関する研究

研究アドバイザー

独立行政法人国立特別支援教育研究所 総括研究員 田 中 良 広 (平成24年度)

研究協力校

北海道札幌盲学校 (平成24年度)

北海道高等盲学校 (平成24年度)

平成 2 4 年度

第 2 6 号

Hokkaido
Special
Needs
Education
Center

研究紀要 第 2 6 号

平成 2 5 年 3 月発行

発行者 北海道立特別支援教育センター

所長 藤 根 収

〒064-0944 札幌市中央区円山西町2丁目1番1号

TEL (011) 612-6211 (代表)

FAX (011) 612-6213

Web <http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/>